

東北縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

七斗蒔遺跡 概報
円持遺跡

福島県文化財調査報告書第22集の5

昭和45年3月

日本道路公団
福島県教育委員会

序

本県は、原始時代の遺跡はもち論、関東との接点に位置するところから、古代の遺跡が特に多く、われわれの祖先の生活文化を、如実に物語っています。

東北縦貫自動車道の建設が計画されるや、これら文化財の適正保存をはかるべく、昭和41年より分布調査を実施いたしました。これにより、極めて重要なものについては保存をはかり、記録保存すべきものについては更に予備調査を実施して資料を整え、最終的に50余カ所の遺跡を発掘調査することになりました。

本事業は、3年計画のもとに進め、本年度はその初年度にあたり、13の遺跡について8次にわたる発掘調査を実施し、予定通り終了をみてその調査概報を発行するはこびとなりました。もとより概報でありますので、不じゅうぶんなものではありますが、学術資料としてご活用いただければ幸いです。

本調査に際し、ご多忙の中、発掘にあられた調査員各位、郷土の文化財保存の熱意からご援助下さった協力者の方々、並びに調査の運営に、全面的ご協力を惜しまなかった市町村教育委員会をはじめ、関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和45年3月

福島県教育委員会教育長

三 本 杉 國 雄

目 次

1 調査の経過	3
(1) 付近の遺跡	3
(2) 従来の調査	4
(3) 今回の調査	4
日誌	4
経過	6
2 調査の概要	9
(1) 地形	9
(2) 遺構	10
(3) 遺物	13
3 考察	16
(1) 遺構、遺跡について	16
(2) 遺物について	17
(3) 復元家屋について	17
(4) 結び	18
4 円持遺跡	19

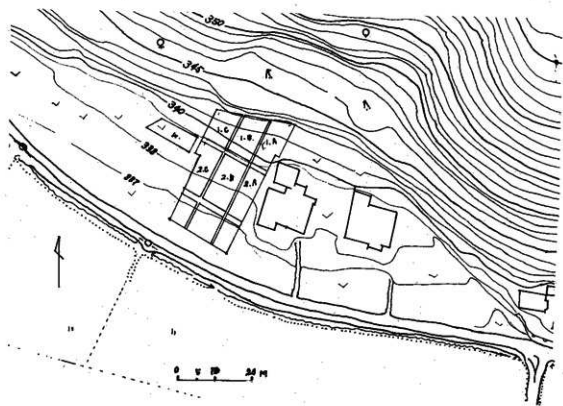
凡 例

- 1、この発掘調査は、日本道路公団と委託契約を結び県教育委員会が発掘調査を実施したものである。
- 2、概報なので、原則として実測図は付さず、出土品も未整理のものは省略した。
- 3、全体計画終了後、報告書として一括して刊行する予定である。
- 4、執筆は、担当者・調査員・参加者などが分担したものもある。図面・写真も同様である。
- 5、出土品は、県及び関係市町村教育委員会で保管している。
- 6、編集は、事務局職員が担当した。



(1) 遺跡附近地形図 ×印下七斗跡・上円持

1 : 50,000



(2) トレンチ配置図



全 地 質 測 量 圖

遺跡名	七斗蒨遺跡、円持遺跡
所在地	白河市萱根字七斗蒨、白河市小田川字円持
調査期間	昭和44年9月24日→10月8日
調査主体	日本道路公園・福島県教育委員会
調査担当者	鈴木 啓
調査員	藤田定興、村川友彦、江藤吉雄、日高 努、金子誠三
参加者	田中正能、有我一二、鈴木安信、岩田敏之、加藤義久、永山倉造、小野克雄、阿部尚雄
協力機関	白河市教育委員会、白河市役所小田川支所、白河女子高校歴史クラブ（部長・藤原ゆり子、部員・石山千代、稲田美也子、近藤幸子、酒巻良子、佐藤澄子、鈴木孝子、田崎朝子、富永トク、堀まき子）

1 調査経過

(1) 付近の遺跡

七斗蒨遺跡の南をほぼ西から東へ流れる高橋川に沿った地域には遺跡が多い。当遺跡付近から上流の大谷地方面には見あたらないが、下流の萱根雞子神社下から桜岡、久保、久田野、本沼方面には特に密集している。なかでも故藤田定市氏による天王山遺跡があり、また九反畑遺跡からは墨書銘土師器が出土し、疑問はあるが久保横穴古墳からは「集古十種」記載の金装太刀が出土している。この付近の文化の中心をなす地域であろう。縄文遺跡が少なく古墳と土師遺跡が多い。

「福島県遺跡地名表」記載以外の付近の遺跡は次の通りであるが、詳細に調査をすれば高橋川下流方面と阿武隈川沿岸には、まだまだ発見される可能性が多分にある。

付近遺跡一覽表

名称	所在地	遺跡の種類	立地	地目	遺物・備考
桑ヶ作遺跡	大字萱根字桑ヶ	土師	水田		
金ヶ入噴跡	◇ 金ヶ入	古墳	山林		円墳3基(昭44、壊滅、遺物不明)
三本木遺跡	◇ 三本木38	土師	畑		土師器(昭39、大 厩完 形土器6ヶ出土)
鳥小前◇	◇ 鳥小前	土師・須恵	畑		散布地(雞子神社下西側斜面)
棒の入◇	◇ 棒の入24	土師	畑		土師器(昭44、完 形土器2ヶ出土)
蟹沢◇	◇ 蟹沢	土師	畑		土師器片多 敷散布(地名ガンザ)
北の内◇	大字鹿島字北	土師	畑		耕作中土師器片出土
袖ヶ久保	大字泉田字袖ヶ久保13	土師	道路敷		昭33.2、泉田久田野間村道拡張工事中俗名木無山の 露見
鬼ヶ窪◇	◇ 鬼ヶ窪	縄文・土師	畑		4号国道沿い
久保◇	大字大字久保	土師	墓地		土師器(昭26.5、埋 葬穴掘りの際 土器5ヶ出土)
本沼◇	大字本沼字本沼160	土師	果樹園		土師器(昭28. 11、完 形土器)

(江藤吉雄)

(2) 従来の調査

昭和43年5月16日、道路予定地内遺跡として調査した当遺跡は、福島県遺跡地図、福島県遺跡地名表にも記載されない遺跡であった。中心杭STA105+80→STA107+40間の左右に位置している。遺跡は、奥羽山脈の山脚部が東に延びきった末端丘陵、洪積台地であり、寛寂部落より西、江花に向かう旧街道を境に、南は道路直下より水田となり、その中央を高橋川が流れ、道路に接して北はゆるい傾斜の甍面せる畑が一部開かれ、頂部は雑木林となっている。この畑地表面で、土師・須恵片を発見しており、調査を行なった所、焼土、伊石と見られる焼石の露呈、石組の露出も確認され、地下20cm→40cmには、6基の炉跡を探索出来、中心杭STA107+0→STA107+20の線中心の、東側に1m×1mの試掘溝を掘った所(第2地区A地点内)、地下10cmより黒色炭層となり、その層は厚く木炭、焼土、土師片が混入されており、1.5mの下部に炉跡、石組、焼土層と並んで完形の甕が出土したので、作業を止め埋戻しを行なったが、灰土層は厚く下部に延びており、地山までの確認には至らなかった。

しかし数多くの炉跡群より見て、土師器時代における住居跡群として、県内に於いて貴重な遺跡であり、かつ生活環境としても、日照、風除け、水利、交通上格構の地を占めており、未調査、未確認遺跡として、東北古代史上の重要性が考えられ、その旨報告した珍しい遺跡である。

(田中正能)

(3) 今回の調査

日誌

9月24日 水曜日 雨

朝から激しい降雨。関係者一同白河市教育委員会に集合して打合せ。

午後現場で、作物撤去につき地主と個別折衝。雨あし衰えず作業断念。

9月25日 木曜日 晴後曇

朝のミーティング後地区割り。コンターに平行して中軸線を定め、これに直交して東よりトレンチ(2m幅)、土置場(3m幅)を交互に設定、A→D、T(トレンチ、以下同)と命名。更に群を設けて上・中・下段に分け、第1地区～第3地区と命名。更に西側中段に第4地区設定。野菜撤去できず空地を掘る。桑の根かなり残存。

市教育長、同次長、同課長、草野主事、支所長、小田川小校長、同教頭各氏見学。

9月26日 金曜日 雨後晴

ミーティング後野菜撤去。ベルコンによりA→DTの粗掘り。夜来の雨で土が重い。

第1地区A、CT(1のACと略称以下同)でロームの切り込み発見。4で炉跡攪乱状態で発見。1のC、DT接合のため排土作業。1Aで杯2個出土。県南教育事務所主幹外3名見学。

9月27日 土曜日 晴後曇

ミーティング後1のA、D、及び4を重点的に粗掘り。地形測量。3年前まで桑畑だったためかなりの深さまで攪乱されている。

午後は1のC、DT間の排土と1のA→DTに亘る北のローム壁の検出に全力を注ぐ。

1のAで土製勾玉、甕3点出土。

小田川小職員、地元民多数見学。

9月28日 日曜日 晴

1のA、B Tと2のC、3のC Tに作業員の班を編成して重点作業展開。2のC下段に右組みと並発見。1の上段への排土不能になり、ベルコンを離いで3のA Bへ捨てる。1のB、C間の土は一輪車で3のA Bへ運搬。1のAで壺1、杯1発見。柱穴も数個検出。1のBで煙道らしきもの、この前で刀子1出土。

遠藤英雄氏、大竹教諭外多数見学。

9月29日 月曜日 晴後曇

1のA・B間の排土と2のDの掘り上げに全力を注ぐ。2のDは焼土と木炭多量に出土。1のBより鉄斧検出。1のA土器群精査。柱穴3個発見。ベルコン分離して2のA B間とC Dの排土作業を進める。

草野主事応援、地元民多数見学。

9月30日 火曜日 曇

1のAの整理。2のC・D T及び土置場の排土。1のA写真撮影。1全体のローム面検出作業。2のC・D Tの排土、壺出土。2のT間の排土進捗良好。1の平板測量、土器実測。

県教育長視察、大越課長、市教育長、阿寺島課長、草野主事随行。

10月1日 水曜日 雨

昨夜来の雨激しく現場は泥海と化す。にもかかわらず作業員数名参集。鉄骨テントを1のAに移動し、土器収納作業。土器を取上げた結果三方を立石で支えたが検出。午後百数十名分の貸金支払い事務。

なお、全面発掘が進展した結果、地点の呼称を次の通り変更。(遺構別にするため)

1と2をほぼ縦に3等分してA-C地区とし、計6地区とする。3は包含層なく、4は擾乱のため放棄し土置場を利用。

10月2日 木曜日 晴

1のA B精査、実測、撮影。1のAで煙道と壺検出。1のB煙道前灰層中より金環発見。ベルコンを1のCに移動してローム面の露出作業。2のB Cの排土作業展開、焼土、壺出土。

県南教育事務所指導課長、水戸主事、草野主事、高萩氏見学、白河女子高史学クラブ7名協力。

10月3日 金曜日 曇

1のCをベルコンにより排土作業。僅の東側に土器の集積検出、ローム北壁を造る。1のBの煙道は、L字型に抜けていることを確認、その前の灰の堆積はローム床に達していることを確認。2のCの排土作業、灰、ローム壁、缸、土器発見。2のA生活面に土器群検出。2のBに缸、土器群、袋状ピット、はそう発見。

白女生7名協力。

10月4日 土曜日 曇

1のBの掘り上げ、Cの精査、Bではロームを2次的に切り下げたプラン検出。2 A精査、2 C木炭累累々と続く。2 B実測、撮影、及び写真実測。

白女生7名協力。部落民多数見学。

10月5日 日曜日 曇

1のローム床面検出作業。1のBの中央にもう一つの切り込みプラン検出。Cでピット発見、Bのピットは巨大で壺2個あり。AB柱穴発見。2のBC排土作業、Cの炭化材の検出手間取る。この部分西へ拡張のためベルコン移動、全力発掘。2のA実測図作成。

白女生10名協力、郡山市史編纂室一行、永山倉造氏応援。部落民多数見学。

10月6日 月曜日 晴

7時30分作業開始。1全般の整理と柱穴探査作業、2のCの木炭プランの追求に全力傾注。

円持遺跡を一班編成して発掘。1m×15mのトレンチ設定して調査。

小林主事応援に来る。疲労の極にある一岡元気百倍。

10月7日 火曜日 晴・強風

7時30分作業開始。各地区とも測量、写真撮影、実測。気はあせるが思うように進展しない。夕闇に包まれるまで奮闘。

小田川小5、6年200名、白河四小全職員見学。白女生7名協力。賛金支払い事務。

10月8日 水曜日 雨

7時30分作業開始。今日の雨は泣面に蜂の騒あり。ビニールを被って図面を書き、傘をさして写真を撮り、濡れ風になって土器を収納する。数日余の仕事を残したまま闇に閉ざされた。

白女高校長、白女生7名見学。

(鈴木 啓)

経 過

第1地区A地点

この地点は耕作上は浅かったが近年の開拓で、擾乱されることなく、保存が極めて良好であった。地表下約40cmでプランがあらわれ、炉跡とカマドが発見された。炉内及び周囲には土器を使用した生活そのままの状態が発掘された。炉内の2個の長胴型甕は横倒しになっていたが、いずれも倒れるのを防ぐため、灰中に突き刺した扁平な炉石にたてかけるようにして使用されていたようである。炉内のこの種の土器は煮沸用に使ったものと思われる。近接して単孔式の甕も出土した。また炉に接近して土製コの字勾玉が倒立した姿で発見されたのは特筆すべきである。コの字勾玉の出土は住居内での祭祀を思わせる。

隣接の第1地区B地点は生活面が2層であるのに対して、A地点は1層である。BC地点が床面を設定する際、背後の斜面を1段でほぼ垂直に切り落としてプランの北縁にしているのに対して、A地点は2段にしかも斜めに切り落としている。発掘面積の拡張によって柱穴が多数確認された。北側の3本の柱穴は切り落とされた1段目に東西にはば一直線上に並び、プラン面のその他の柱穴とは高さが異なる。柱穴のうち5箇所はほぼ30°角の柱穴で、角柱を用いたのかも知れない。プランの南縁は明瞭でないが、北縁から想像するに余り大きくないプランのようである。またこのA地点の東側に隣接して別なプランがあるようで、すでに北縁東端にその一角があらわれている。倉庫を造る際南半部は破壊されているが、道路工事に先だつて是非調査をしたい場所である。

(44年12月家屋移転工事の際、第2地区A地点より東方へ約28mの地点でも、炉跡と土師器が発見されている)。(江藤吉雄)

第1地区、A・B・C地点

遺跡の最上段にあって傾斜が急であるために、北側の浅い所は、表土下25cmでローム面に達する。ロームは、A・C・Dトレンチで東西に延びており、Bトレンチではさらに北側に見えられた。これらのロームのつながりを見るべく、Aトレンチ東と、Dトレンチ西の拡張を行う一方、2箇の坪の発見されたAトレンチの面も、生活面を想定して拡張する。また、Dトレンチには、ローム近くに焼石が出土し、ここにも生活面を想定して丁寧に広げる。この結果、ロームの延びは、Dトレンチ東拡張において、曲折して南に延びる事が判明。さらに追求したところ、ローム壁は次第に低くなり消えることがわかった。Bトレンチでは、東西に延びて凸状をなし、A・Cトレンチロームとつながることが判明した。ロームは、掘るに従って垂直な断面をもっていることがわかった。Aトレンチ東拡張部にもロームは延びており、さらに東にも続いているらしいが、作物のある畑に達するため拡張断念。Aトレンチ拡張よりは、北壁にローム切り残しの遺が発見され、その東南には灰と焼土をとまらうがが発見された。炉の周囲よりは、長壺形土器、壺形土器、手捏土器、土製勾玉、鉄鏝等が出土し、生活面であることが判明した。Bトレンチ拡張では、ローム壁上に、径25cmの丸い焼あとを発見していたが、これは煙道であることがわかった。焚口も発見された。東南1.5mには炉があり、堆積した灰層の広がり顕著であった。この灰層の中より、耳環、刀子が出土し、これよりはなれた所より鉄斧が出土した。A地点にみられたような土器群はない。Cトレンチ拡張部では、ローム壁に切り残しの壁と、その東南2mには炉が発見されて、ここにも生活面が確認された。A地点にみられた様な土器群はない。またC地点東南端には壺形土器4と、須恵片が発見されたが、ローム床面が段をなして下った所より出土しており、器形も新しいため、別プランが想定される。また、B生活面北壁には壁の西約1mに半分に切断された煙道が発見され、C生活面には、壁の東45cmより、半分に切断された柱穴らしいピットが2個並列して発見された。

以上題と炉をもつ三つの生活面は、それぞれ精査の上、土器を取り上げて、さらに、下層の生活面を確かめるために掘り下げた。この結果、A生活面は僅かに下がったのみでロームに達し、B生活面は、さらに下ってA生活面とは段をなしている事がわかった。B生活面中央西よりの地点からは、方形状のプラン落ち込みが発見され、中から壺形土器2個を発見。南端には、黒褐色の深い落ち込み層があり、掘下げた結果、中から2個の壺形土器が出土した。貯蔵用穴と考えられる。C生活面は、床面が愕然としないため、さらに掘下げたが、甕や茶褐色土、土器が混入した堅い面のみで、これ以上は下がらず、結局これが貼り床であった事がわかった。東北端には、B生活面同様の貯蔵用と思われる大穴が発見されたが、土器はみられなかった。C生活面は、B生活面を切って延びている。(藤田定典)

第2地区A地点

初日調査全区のトレンチ設定に並行し、幅3m、長さ13m、南北に誘張りをし、作業に取りかかったが、他地点の調査の進展により西側に1m拡張し、幅4mとした。

地表から40cmで茶褐色土層の遺物包含層が出土したため、住居跡遺構を確認すべく平面に精査し

たが、柱穴および施設は発見できなかった。しかし他地点の調査に主力を移したため本地点の作業を一たん中止した。

10月3日再び掘り下げた作業にとりかかり、地表から50cmトレンチ北側で、住居跡と思われる地盤切り込みが発見された。その南地表から120cmの深さで黒褐色土層のはり床面があらわれ土器完形品多数出土したため掘り下げ作業を終了した。また地盤面を確認するため、トレンチ中央部に幅50cm南北にさらにトレンチを入れた後、断面図及び平面図の作成にとりかかった。(村川友彦)

第2地区B地点

B・Cトレンチの掘削を進める一方、層位確認のため、Bトレンチ内に50cm×9mの小トレンチでロームを遡る。その結果B地点は2段に整地され、北縁ではロームを切って下げ、南端では逆に黒土を盛っていることが判明した。

北縁より8.30m南に行って約70cm下る段を有していることも判明した。

北西隅に、高さ12cm前後、辺が2.80mの扇状ロームの台が検出され、自然層の残存とみられる。この縁に甕・杯が発見され、生活面とみられるに至る。次いで炉・竈・杯が加わりプランの確証を得る。周壁を遡って精査を進めるが、北縁のローム壁以外は黒土のため、何ら変化は認められず、従って明確な規模も追求できない。

扇状ロームの台に袋状ピットが発見され、掘り上げるが、堆積を示す層位は看取されない。この上部(野の中)より須臾一点(はそう)が出土、層位からこのプランに伴うものではない。

精査を進めると、コの字状に粘土を築いたものが発見されるが、焼けてはいない。この北に接して60cm×10cmの灰の堆積が現われ、その中央は約45cm×50cmの円形に焼土となっており、炉とみられる。土器は、甕4、壺1、杯5が検出された。柱穴は1個のみで、他は丹念な調査によっても不明である。(鈴木 啓)

第2地区B地点下段

この地点は上段が炉跡や床面をはっきり検出できたのに対し、不明確に終わった場所である。上段プランの南半もそうであるが、下段はいっそう黒色土が厚くプランを検出することが困難であった。南半の段をなす位置には3個の大きな石を斜めに使って構築した石組が発見され、はじめこれが何であるか不明であったが、掘り進むにつれて黒色土層中に築かれた炉の一部であることが判明した。炉の周辺から土器群が発掘された。地表下約120cmである。これは当遺跡全体が傾斜地にあるため、土砂の流入によって厚く堆積したためであろう。

この炉跡を基点として隣接の第2地区A地点の方へ発掘を進めたが柱穴らしいものを1箇所検出したことと、散乱する土師片を少量発見しただけで、ついにプランを検出することができなかった。図に示すように上段に向かって試掘溝を入れたが、黒色土が徐々に薄くなるだけで上下段のプランの境目は判別することができなかった。3個の炉石の石組から想像するに、この炉はプランの北縁に位置するらしい。第3地区の方へは試掘溝以外に発掘を進めなかったが、地山が急に傾斜し、南方の水田地帯と同じレベルの湿地がこの近くまで迫っているので、プラン全体が黒色土面に設定されていたようである。隣接の第2地区C地点は生活面が2層であるのに対して、ここは1層である。第3地区へ発掘を進めれば、あるいはプランが確認できたかも知れない。(江藤吉雄)

第2地区C地点

該地点西半分、地表より120cmの深さに発掘したところ、2→3cmの砂に覆われた焼土と、多くの木炭片を含む層が見られたので、この面を、B地点との境界の畔まで拡張した。

この面を精査すると、北西隅に近いところに、繊維質の織物(多分むしろに類したもの)が、約0.5㎡位が発見され、その一端は家屋内の木炭化物の下の方に延びているように思われた。全体的に木材の炭化したものが方射状に発見され、それに直交すると思われる木炭化物が数本見出し、全体の景観は、小形の寄棟造りを、僅かに北西の方より力を加え、上から押し潰したかの観があった。

とくに、木炭化物の太さには注意すべきで、炭化したとはいえ、径10cmに及ぶものもあった。この焼失家屋跡に接するB地区には、このような火災的な痕跡はなかった。

調査期間内に炭化物の下面は精査しなかったが、土器片は比較的少なく、完形品は見なかった。

(事後の調査で、炉跡より出土)

以上より

炭化物の上が砂に覆われていたこと。

家屋の構造を示さんばかりに、木炭化物が攪乱されていないこと。

繊維、織物の炭化物が発見されたこと。

などを考えると、火災によるものでなく、ある静穏な天候の時に、四周に類焼しないよう配慮しながら焼却されたのではないと思われる。

(鈴木安信)

第4地区

第2地区の西側に連続する地点で、崖と道路に挟まれて、地域はせまい。柿の木があり、地主がその南の地点で炉を確認しているところから、15m×7mのトレンチを設定した。ベルコンによる排土を進めると、西半ではルームまで約30cmと浅い。ルームに溝が断続して東西に発見されたので、これを東と南に追った結果、平行に5本6本と増加する。この溝底からナイロンが出土するに及んで、耕作痕であることを確認して放棄し、土置場に転用して東半の調査に切替える。

柿の木の下の方の炉跡をとらえるべく発掘を進めると、-30cmで焼石を発見。すでに動いているがプランを造るべく、ベルコンを使用して西と東に拡張する。土器片出土層は、数層に数層にわたっているが、うぶな状態ではない。第1、第2地区に見られるような、住居跡北壁とみられる地盤の切込みが、地表から約40cmの深度で発見されたが、数段に断続して残存している状態である。

ルームまで浅く、地形が南へ傾斜するごぼう畑であるため、すでに原形を認め得ないまでに破壊されている。

(岩田敏之)

2 調査の概要

(1) 地形及び立地

白河市街地周辺に広範囲にひろがる低い丘陵-白河丘陵-は、石炭安山岩からなり、その上はルーム層で覆われており、阿武隈川とその支流によって小丘陵塊に分断され、開折されている。

白河の街の北端、街中を貫く旧奥州街道、会津街道・国道4号白河バイパスの三叉する地点より、阿武隈川の支流高橋川の流域水田を、北西700m距てた丘陵南斜面が七斗葺遺跡である。

高橋川は近年改修され、流域水田は耕地整理を完了した。七斗葺の西南方4号国道を距てて、「根田」「新小堂」（両者合めて賞根村、後に小田川村に編入・現白河市）の集落がある。

七斗葺を含む細長い丘陵は、「日向山」この日向山をはさんで北の反対側は、「後谷地」、また七斗葺と高橋川を隔てた南の水田地帯は「大清水」である。

なお、遺跡のすぐ背後の丘陵頂の部分で、土地の人は「ゲンベイシロ」・「ゲンベイダテ」とよんでいたという。

遺跡と同じ丘陵腹、北東100mに「道成寺説話」に因む、「安珍の墓」があり、少しはなれた丘陵頂に「安珍経塚」と中世の板碑がある。しかし、前者は近世の供養碑であり、後者の板碑は後年何処からか移動したものである。（金子誠三・日高 努）

(2) 遺 構

第1地区A地点

B・C地区の北壁が、地層のきれいな垂直に近いローム切断面をもつのに対して、段をなした比較的緩やかな傾斜壁をなしている。しかも門内の激しいローム面をもち、柱穴を交えたピットが不整形に多く出ている。この傾斜面の終るあたりにロームを切った竈をもち、その東面2m前後の所に炉を設けている。炉には板石に長窓形土器2個が倒伏状に並んでいた。2個とも底部に石のおさえをもっているのが注意される。他には、坏形土器、甕形土器、土製勾玉、手捏土器、鉄鏝等が炉の周囲より出土している。これら炉と竈と土器群をもつ面は、A地区点最終生活面であると思われる。この時期の前後にも生活面があったかと思われるが確認は得られなかった。東西には壁がなく、北壁は竈の20cm西より急に曲折し、北に1.5mの所で西に延びてB地点の北壁となる。即ちA生活面壁はB生活面壁によって切られている。床面は僅かな傾斜をもって南に延び、第2地区A地点の北壁をなす。（藤田定興）

第1地区B地点

北側にのみローム壁をもち、東西に壁はない。中央わずかに西寄に、壁をL字型にくりぬいて煙道を設けた竈を有し、その東南1.5mの所に炉がある。この炉と竈を中心とするのがB地点最終生活面である。A生活面にみられたような土器群はないが、竈の南灰層中より耳環1、刀子1が出土している。ここには3層の層位がみられる。1層は表土下40cmの土器散布面、2層は、竈の西約1mの所に半分に切断された煙道がみられ、この煙道をもつ竈を有していた古い生活面と想定される。つまり、B地点北壁は、以前はもっと南にあって、これを何らかの意味で北に延ばしたと考えられる。B床面はAより低い。B生活面は中央より西側は、C生活面によって切られており、このC生活面より甕形土器、坏形土器、朱の小塊が出土している。

B地点南端には、1.3m×1.5m、深さ2.1mの大穴が発見され、中から壺2個が出土した。さらに西南端には1m×1.5mの灰の堆積層がみられる。北壁は西に延び、竈より3.5mの所から南に1.5m曲折し、さらに西に延びてC生活面北壁となる。床面は南に延びて、第2地区B地点のローム壁をなす。（藤田定興）

第1地区C地点

北と西にローム壁を持つ。東西に延びる北壁中央東寄には、ローム切残しの竈を設けており、その東南約2mには炉がある。西北端には貯蔵用と思われる1.7m×1.8m、深さ1.7mの穴があり、この炉と竈と大穴を中心とするのがC地点最終生活面である。床面は土器片を含んだ粘土貼り床で、竈の周囲に杯、碗が出土。C地点には3層の層位がみられる。1層は最上層で、表土下40cmにみられた土器散布面。2層は、竈の東45cmに半分に切断された柱穴らしいピットが2個並列して発見され、このピットをもった生活面に想定される。即ちC最終生活面よりも古い生活面が考えられ、C地点もB地点同様、ローム壁を北に延ばした形跡が窺われる。

B生活面にみられた落込プランは、C生活面と同レベルにあり、はり出しプランの格向である。床面南端東寄りには浅い落ち込みがあり、杯4個が出土。これは、Bプラン南西端の焼・灰の堆積層と関係があるものと思われる。杯はロクロに使用のものであるから、A・B・C最終生活面よりは、明らかに新しい時期のものである。面としてとらえられなかったのは残念である。

以上、A・B・C生活面は、次のような時期的関係を示すのではないと思われる。即ち、AはBよりも古く、BはCよりも古い。さらに、CとBには上層のプランが想定され、それぞれ古いプランがあったと考えられる。

遺跡全体に言えることであるが、1～4地区のどの生活面も、いわゆる竪穴住居ではない。特に1地区は切り残しの竈にみられるように、傾斜地での平地造成段階で、既に個々の住居設計がなされていることが注目された。

(藤田定興)

第2地区A地点

本地点では、住居跡床面が2層に分層される。上層は地表から80cmの深度で、粘土混りの茶褐色土層で土器片が包含する。しかし住居跡遺構としての柱穴および備置は精査したが認められなかった。

下層床面については、地表から1.20mの深度で黒褐色土層のはり床面である。

地点北側は、第1地区A地点の地盤面の延長が直角に切断され、それに接し径20cm程度の灰の圓りが残存している。またそれより南へ2mの位置から炉跡とみられる焼土が出土している。この住居跡プランは東方へ延びるが、家屋のため調査不能であった。

地点中央向床面では、土器完形品が多数出土し、また炉跡の施設と思われる石が出土したが、柱穴および備置は発見されず、住居跡遺構を確認する資料は得られなかった。

それより南寄りの床面は約15度の傾斜する地形となり、第2地区B地点南側へ続いている。

(村川友彦)

第2地区B地点上段

西、北、東に畔があり、この北西隅から半径2.80mで扇状にロームが張り出している。ロームは高さ12cmの台状に周縁を切った姿で検出された。これは更に、半径3.50mで黒土下0→10cm、4.50mで20→30cmとレンズ状に堆積がたつぎ、この上の黒土が整地され住居が営まれている。

北壁(上縁)でロームを約70cm切り落とし、南端ではローム上に黒土が1m乗った形で造成されている。南端で約1.20m段状に下って削平面があり、別の遺構となる。

ロームの台縁に接して90×60cmの方形状に灰の堆積があり、中央は45cm径の焼土である。これに接して南側は、1辺60cmのコの字状に（東あき）粘土があり、内部は-30cmで、ここから南へ傾斜が急になる。

遺物はこの灰と粘土塊を中心に配置されている。即ち、粘土塊の両角に壺1、甕1（伏位）この北側にこしき2、杯3（重ねて）やや離れて杯1、粘土塊の南に壺1、杯1、東に杯1、やや離れて壺1、西に柱穴1と貯蔵穴1、この上より須恵（はそう）1、その他破片7個体分が出土している。

柱穴は径28cm、-32cmで、他の3点は検出されない。貯蔵穴はローム台上にあり、1m×1.1m-1.25m、底は1.60×1.50mと下ふくらみの形になっている。

第2地区B地点下段

上、下段遺構間の距離は、約6.50mである。上段の傾斜が終るところに40×25cmの平石を1個ほぼ平に置き、これに連続して同程度の石を、約45度の傾斜に3個並べ、次は平地となってここに25×45cmの石組みがあり、更にもう一つの石をその南に置いている。石組み内は焼土で、この東側に10cmの灰の堆積がある。この灰の上と周辺に、こしき2、壺2、甕3、杯1が検出された。石組みの北東上段縁1mに壺1、杯1、東40cm、斜面中段に壺1、同じく1.80mに壺1、同じく5mに手づくね土器1、平地に柱穴3個が検出されている。

上、下段境をなす斜面は、石組みのところで幅70cmと急であるが、東へ3m行ったところでは1m、6mでは2.20mとゆるやかになり、2の1地区では段がみられなくなる。（鈴木 啓）

第2地区C地点

C地点北側の地盤は、第1地区C地点地盤面の延長で約15度の自然傾斜をなし、地点中央部で2段に垂直に切断されている。

生活面と考えられる層位は3層に分離される。最上層は、地表から40cm程度の深さで、土師器片、須恵器片が包含する茶褐色土層である。また中間層は地表から70cmの深度で、特に須恵器が多く発見された。地盤切込み附近からは多量の灰の固りの遺存がみられ、また同面東アゼに接し炉跡が発見された。しかしこの2層の住居跡遺構は、破壊済みで発見できなかった。

地表から180cmの最下層では家屋の建築木材が焼け落ちたと思われる炭が、南北5m東西5mの範囲一面に出土した。特に西側では木材を十字あるいは平行に組んだ痕跡のちる状況で出土した。

住居遺構は、北寄りでは地盤が露出しているが、南寄りでは黒褐色土層のほり床面である。柱穴は南北約3m、東西約3m間隔に一边約20cm、深さ約70cmの角状のものが6本発見され、またピットは、北東柱穴から北寄り50cmの位置から南北50cm、東西1m、深さ50cmのもの、北西柱穴から西寄り1mから、上縁で南北50cm、東西90cm深さ50cmの2個が発見された。

このことについては、草野氏が、考察で説明する。

（村川友彦）

第4地区

住居跡が、1→4層と推定されるが、根の深い作物を栽培し、破壊が甚だしく、確認することは困難であった。

炉跡と思われる焼土と、灰の堆積があり、石塊1箇が散っていた。（河出「古墳時代」F160ページ

ジ) それより40cmほどのところに、埋立てられた変形土器1個が出土した。

床面には、土器片は相当数あったが、細片で拡散しており、器形の推定は困難である。

なお、住居跡については、1・2層が傾斜地前面に3・4層が後部に、7・8cmの差で階位を持つが、必ずしも1・4層の順に年代を有しているとは決定し得ない。3・4の後に1・2が営まれたかも知れない。

(岩田敏之)

(3) 遺物

第1地区A地点

ほとんどが北壁切り残しのと竈と炉の周辺より出土している。

長頸形土器 4

1は、やや下部ふくらみ。2は、胴ふくらみである。3個とも体部に溝の深い刷毛目文が施されており、内1は、口縁がシャープな外反を示し、口縁部内面にも横線の刷毛目文が付けられている。焼成良好。胎土に砂粒があるがしっかりしている。底部はやや上底。他に底部欠損の小形長頸土器1があり、刷毛目はなり。焼成はあまりよくない。

壺形土器 1

胴部に最大幅をもち、ほぼ球形状をなす。小さな、わずかに外反する口縁部をもち、肩の一部に刷毛目文がみられる。厚毛で焼成は良好。底部上げ底。

杯形土器 5

1は体部より稜角をなし、大きく外反する口縁部をもち、2は体部より稜線をもち大きく開いているが、心持内彎する口縁をもち、1は、稜線が顕著でないが、外反する口縁をもち、以上は、内面を窺によって、口縁部は横に、体部は放射状、又は斜状にまであけて丁寧に整形した内黒である。他には、口縁が直立し、体部との境に心持稜線をもったもの1個と、最大幅をもち体部で稜をなし、内彎する口縁をもった小形でやや深い碗形杯1個。

碗形土器 1

最大幅を肩部にもち、口縁部は、体部の彎曲にそった内反を示す。横になでつけた整形の口縁と体部境に横かに稜線を認める。上底。

手捏土器 1

粘土紐による輪絞整形でなく、粘土の固りを凹ませて雑に撫で上げたような整形である。平底。

土製勾玉 1

焼成のあまり良くない口の字形を呈している。

その他土師片多数、須恵片混入。

第1地区B地点

北壁に掘り抜き式の竈をもつ竈の1.5m東南、炉灰堆積層より刀子1、耳環1出土。Bプラン中央西寄に鉄斧1出土。B生活面切込のC生活面より、変形土器2、朱少々。1は肩の張りが弱く、胴部も弱い最大幅をもち、口縁はゆるやかな外反を呈す。焼成も良い。1は、球形をなして胴部に最大幅をもち、「く」の字に外反する小さな口縁をもち、

稜線をもち、大きく外反する口縁を有する内黒杯1。

貯蔵用大穴より壺形土器 2

2個とも球形をなして 胴部に最大幅をもつが、1は胴部より上を欠損のため口縁は不明であるが、1は垂直な立上りをもつ口縁を有して特徴的である。体部は斜状に丁寧な筭研磨が施されている。2個ともやや上底の小さな底部をもつ。

その他土師片多数、須恵片混入。

(註) 後の土器整理の際上半分が復元され垂直に近い立上りをもつ口縁であることがわかった。

第1地区C地点

北壁切残しの甕と、甕の周囲より出土。

碗形土器 1

胴ふくらみで球形をなし、外反する口縁部をもつ。内面は、丁寧な筭研磨によって研かれた内黒で強い光沢を有す。外面は筭ずりで形よく整形されている。焼成、胎土良好。

杯形土器 5

1は、口縁部が、体部との境に後縁をもち外反する。体部はやや深みをもっている。

他の4個はセットをなし、ロクロ使用の内黒で光沢はない。平底で深い形をもつ。内1に張書銘があり、底部に布痕と×印がみられる。

他にも字体不明の黒書土器片1、甕1、土製紡錘車1出土。

(藤田定典)

第2地区A地点

出土遺物は、土師器、須恵器、砥石の3種であり、土師器については、坏類11点、壺類1点、甕類1点他研片多数である。この内土師床面からは内黒が出土したが、下層床面からは出土しなかった。

壺甕型土器 1

高さ15cm口径14cmで底部に直径3cmの円形の孔1個を有する。口縁部は外反し胴部にかけてはゆるやかな曲線で体部にやや丸味を持っている。口径より胴径がやや大きい小型壺型土器である。

碗型杯 2

内外が赤褐色を呈し、口縁部と胴部の境に明確な後縁を持たず、体部にやや丸味を持つ丸底の土器である。また、内側は底から上方へ土器整形時に施したとみられる手でこすった痕がみられる。

杯型土器 9

口縁部がやや外反し、明確な後縁を持ち胴径より口径の小さい土器である。また高さに対して体径の比率が大きく、赤褐色を呈し碗型杯と同様内側に手のすり痕がみられる。

砥石 1

長さ12cm幅5cm厚さ3cmの角状の石で、石面中央部は使用したと思われる凹状に磨減している。須恵器については、殆んどが細片で器型を示すものは出土しなかった。

第2地区B地点

本地点出土の遺物は、土師器、須恵器が主であるが、特に土師器は他地点に比較し多量に出土し、豊富な資料を得た。

a 甕壺型土器(復元可能のもの2点、他1点)

上段ブラン炉跡附近出土の1点は、口径21cm高さ25cm底部に直径8cmの円形状の孔1個を有する。胴部から口縁部にかけてゆるいカーブをもち外反する長頸型土器である。

他は、下段ブラン石組カマド中より出土し、口径21cm高さ25cm底部に直径6cmの孔を有し、胴部に丸味をもち、不均衡な器形の変型土器である。

長頸型土器 2

上段ブラン炉跡附近から出土し、口径17cm高さ30cm底部径6.5cmのほぼ同形の2個であるが、1個は、最大径が胴部下にあるいわゆる下脹みの器形で、底部がやや厚く、外表面が熱により赤褐色に変色している。

c 杯型土器 3 (上段ブラン炉跡附近より重なってセットで出土)

口径16cm高さ5cm、口径23cm高さ7cmの2個は、いわゆる内黒で稜線が低く、口縁部が外反するが、他1点は、稜線が上り、口径より胴径のやや大きい器形を有する。

d 杯型土器 1

口径14cm高さ4cm、土器内外表面が黒褐色を呈し、稜線は中央部にあり口縁部は外反する。また内側表面は土器整形時に施された指でこすった痕を有する。

e 手捏土器 1

上段ブラン南寄りから出土したもので、平底で、輪積粘土を凹状に摺てた製法のものである。

釥 1

上段ブラン貯蔵穴と思われるビット土の茶褐色土層中から出土したもので、口径部および頸部は欠損している。胴部径12cmで肩部に直径1.5cmの円形状の孔1個をもつ。頸部下部および、胴中央部に波状の沈線文様が施されている。

第2地区C地点

出土遺物は、土師器、須恵器、炭化木材、織物炭化物である。土師器については、甕寛1点杯4点、高台付坏片2点、蓋片1点内黒糸切坏1点、高坏片1点他破片多数である。

甕寛型土器 1

口径11.5cm高さ15.5cmの小型甕型土器で、底部に直径4cmの円形状の孔1個を有する。内外ともに黒褐色を呈し体部外側に土器整形時についたとみられるたたき痕が細い沈線のみみられる。

杯型土器 4

口縁部が外反し稜線が非常にひくく、底部直上にあるもので、大部分はいわゆる内黒であるが、1個のみ器型は同種だが、土器表面内外側に赤褐色のものが付着している。

高台付坏片2、蓋片1、内黒糸切坏1、いずれも細片で全体の器形を知りえない。出土地点は上層および中間層の茶褐色土層中から発見されたものである。

須恵器については、殆んどが細片であるが、青海波文を有するもの、自然釉がみられる破片が主なもので、上層および中間層から出土し、特に地盤切り込み附近の灰の固り中あるいは週辺から多量に出土した。

第4地区

出土遺物は、土師器、須恵器の2種であるが、須恵器は殆んど細片である。

土師器についてみると、甕類1点、杯類2点である。

甕型土器 1

口径13cm、高さ22cmで底部に木葉の片痕を有する。体部下部がやや膨み、第2地区B地点の類型土器と類似する。

碗型杯 1

口径に対し副径がやや大きく、内外側が赤褐色を呈し、口縁部は外反し中央部に稜線を有するもので、第2地区A地点出土の杯同様、内側に手こすり痕を有する。 (村川友彦)

3 考 察

(1) 遺構、遺跡について

2Aのみは、全体からみて別のグループに属し、その仲間は東側の2軒の宅地造成の際に失われたものであろう。

この住居群の全体計画は、1A、2B、2Cの地点において、ほぼ同時期に斜面のロームを3段に削平して生活面を造成したものと考えられる。これらと同時に1B、1Cにも存在したことは、柱穴と煙道の一部残存からも推定できる。

第1地区ではAをBが、BをCが切り込んでプランを作り、西漸を示すが、3者の時間的間隔はそう長いものではなさそうである。1C南東隅に、更に新しい墨書を伴うプランの切り近みが一部遺存している。1C南東隅と、2C南東隅の何れも上層に、石、焼土、灰より成る炉があるが、プランは攪乱されてつかめない。2C隅上層にも夥しい灰層が有り、灰釉須恵片と高台付土師片を含んでいる。これら上層残存遺構間の関係は不詳である。

炉は、1A、2Bにみられる立石が特徴で、煮滯用の長壺形土器の安定上の疑問を解く資料である。1B、1C、2Cは石、焼土、灰よりなるが、1Bのみは石を欠く、このことは、当プランからは土器のセットが発見されないことと併せて、廃棄時の撤去を思わせるから、石も同様に解釈できるかも知れない。

竈は、1A、1Cに、椅子状にロームを彫り出したものが特筆される。床面より一段高く、焚木台の平石を置いている。

煙道は、1A、1Bと、1Bにもう1例Aと同時期とみられるものの痕跡が残されている。焚口に粘土で壁を構成した形跡と夥しい灰の堆積があり、特殊な機能を示唆している点注目される。

第2地区に竈・煙道は検出されない。これは、壁面が低い故か、集落の配置上か、性格上の相違か、今後検討を要する問題である。

貯蔵器とみられるものは、1B、1C、2Cに大型、1A2Bに小型のものが発見された。1Bでは、均ほど埋まった位置に壺2個があり、土砂流入の過程も層位に読める。

生活面は、第1地区に3、第2地区に4、上層に営まれた痕跡4を数える。下層の7個は何れも貼床を施しているのはローム直上では生活に不向きであることを示している。また何れも周壁を設けていないことは、明らかに堅穴住居の範疇に入らないことを意味し、平地住居とみることができ

よう。かなりの土木事業を伴っていることと、出土品を併せ考えれば、一般農民のものではなく、より上層の中小家族を考えなければならない。

(2) 遺物について

2 A出土の、碗形杯のセット9点は、所謂内黒を伴わず、器形からみても土師器編年の第Ⅲ型式に位置づけられよう。

1 A、1 B (プランはCに属する) 1 C、2 B、2 Cは、器形の組合せ、形式上にそれぞれ差異が認められるが、何れも第Ⅱ型式～第Ⅳ式に併行するものとみることができる。同一プラン床上に、セットで出土したにもかかわらず、かなり異った要素の共存がみられ、未整理の資料も尤大なので、今後の検討に俟ちたい。

上層出土のものは、罌書、糸切底、高台付、灰釉須恵などであるから、第Ⅶ型式とそれに続行するものと思われる。

鉄製品には、刀子、鍔差、鉄鏡がある。

土製品には、手摺土器、コの字勾玉、円錐台形紡錘車がある。ほかに、耳輪(メッキ剥落のため、金・銀不詳、台は銅)滑石製臼玉、朱の小塊がある。朱の出土は泉崎横穴の壁面にあるところから注目しなければならない。

古墳の副葬品のセットが出土していることは、古墳被葬者クラスの住居跡であると判断するのが妥当である。土製勾玉、手摺土器、臼玉等祭祀遺物の出土は、生活の中に行事化していることを示唆している。瓦石が数点出土していることも、鉄器の所有を裏付けるものである。

以上のことから当遺跡は、7世紀に中心を置きながら、6世紀から9世紀、あるいはその後に行わたる時期のものであり、居住者の階層は農民ではなく、少なくとも族長クラスと見て、大きな誤りはないと思われる。

(鈴木 啓)

(3) 復元家屋について

地盤面の考察

地層は上から黒土層、焼土層、焼失木材層、埋土層、地山の順である。柱穴のうち東南隅が欠けているのは整地のためと推定する以外にない。地層と出土の状態からみて、木造家屋焼失あるいは焼払いによる倒壊後、消火のために土および数個の石をかけて覆った形跡がある。焼土および石の出土が上部であるのはそのためであろう。

建造物の考察

焼失木材が炭化のまま出土してはいるが、発掘による分離の際、粉塵が四散したり、あるいは焼失が完全なこともあって、部伐中比較的确实なのは、西通りのたるぎ、けたの真跡と、全般的に二三の柱らしいもののみである。

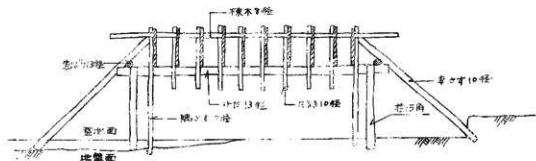
従って、これから家屋復元をはかることは疑問が多いところであるが、柱穴を補充し、他の遺跡復元を参考にすれば、図の姿とそう遠くないものになるろう。

焼失部材の断面は判定しにくい、ほとんど丸太と考えてよいと思われる。

図の材寸はもちろん概略の推定である。

材質は堅木が多く、梁材らしいものは判定できる。

(岸野和夫)



推定 小倉・仙組東山園 1/50

(4) 結 び

七斗時遺跡は、東西に数米平行して横たわる丘陵の一つにあり、丘陵間は細長い耕地として水田化されている。

遺跡は、南斜面に数百メートルに亘って帯状に続いている。発掘面積はほぼ千平方メートルに近いが、全体の何十分の一に過ぎない。しかし該地点で最大幅をもち、地形的にも、表面散布からみても、遺跡の中心とみて誤りはない。

南側第3地区とした部分は、包含層をもち、黒土の土層が2.15m堆積していて、ここで湧水するところから、かつては第2期く雨線まで谷地が迫り、水田を眼下にした立地であることが想像される。

階段状に整地された地形も、長年の耕作と桑の植栽、抜根からの起伏を完全に失ったスロープと化し、プラン南半は何れも削られ、土層の遺構は痕跡のみであったことに付される。

白河周辺は、中島遺跡、南掘切遺跡に古式土器器を多量に出土するのをはじめ、土師の大造塚が、丘陵、台地縁に移しい。

古く回遊交通の環境を整えて中央とのルートを開き、船宿庵寺、関和久遺跡、泉崎横穴をはじめ、白河郡が16郷を擁する大郡であったことなどから、古代に於ける人口密度と文化水準の高い地域であったことは言うまでもない。この様な環境の中で、7世紀に入って郡小族長層が多く成長したが、それらの生活の跡が遺跡であるとみて、大きな誤りはたかろう。白川郷、大村郷、小田郷の何れかと重なる時期のものもあるのを検討しなくてはならない。また、ここに住んだ層の墓所である群集墳、横穴等の検討も今後の課題である。概観の時点では以上にとどめ、詳細に亘る記述と判断は報告書にゆずりたい。

最後に今回の調査結果の要点をまとめる。

1. 大上木下車による平地造成を行ない、平地住居群を構成している。
2. 焼失家屋の残存から、ある程度復元が可能である。
3. 炉、竈、煙道など特異な構造をもっている。
4. 土師器の各器型がセットで出土し、共存関係を窺うことができる。

5、古墳の副葬品がセットで出土し、砥石も多い。

6、住居内祭祀を行なったとみられる遺物が伴出している。

(鈴木 啓)

4 円持遺跡

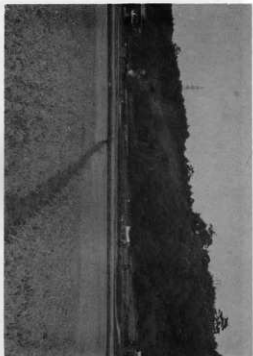
小田川部落西方台地の東斜面で、遺跡の中心は台地上と斜面である。台地周縁は水田で散布のみられるのは畑である。

道路敷は、水田と畑の境界線に添うもので、数年前幅杭上約10mの地点から、変形土師器6個が完形で発掘され、保管されている。

今回の調査は、種があるため水田部分の調査はできず、止むなく中心より南側の空畑にトレンチを設定した。

トレンチは、1m×15mで南北に入れた。地山はロームで、南端で-32cm、中央で-23cm北端で-25cmである。北半の地山は岩盤状で固い。小さな落ち込みがあるが、遺構ではなく、耕作痕とみられる。内黒を含む土師器片数点出土したが、何れも攪乱状態である。岩面をもつ石1箇所出土したが、遺物か否か不明。ローム面上に炭の細片が認められるが、後世のものとの区別がつかない。地山まで極めて浅く、耕作によって完全に破壊済みなので放棄すると共に、遺構は道路敷外であることを確認

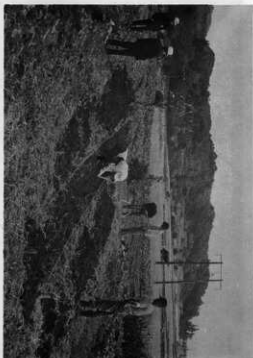
(鈴木 啓)



七十七號測量風景



七十七號測量風景



巴特達跡架掘風景



巴特達跡地点



(1) 第1地区A地点



(2) 第1地区B地点



(3) 第1地区C地点(中央部カマド)



(4) 第2地区B地点



(5) 第2地区C地点 木炭出土状況



(6) 第1地区A地点 カマド出土状況



(7) 第1地区A地点 跡出土状況



(8) 第1地区B地点 カマド出土状況



(9) 第1地区B地点 貯藏穴内土器出土狀況



(10) 第1地区C地点 土器出土狀況



(a) 第2地区A地点 土器出土状况



(b) 第2地区A地点 土器出土状况



(09) 第2地区B地点 土器出土狀況



(10) 第2地区B地点 土器出土狀況



05 第2地区C地点 木炭出土狀況



06 同 左



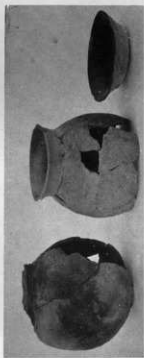
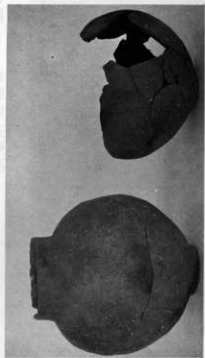
07 同 上



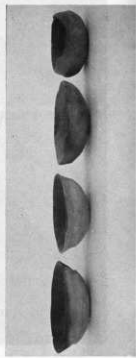
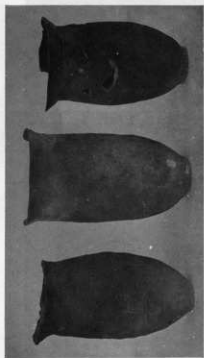
08 同 左

第1地区B地点出土

图
版
I
出
土
物
物



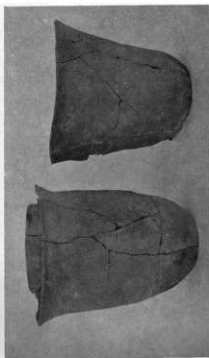
第1地区A地点出土



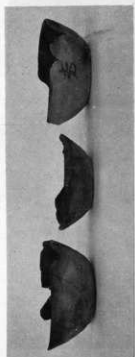
第 2 地区 A 地点出土



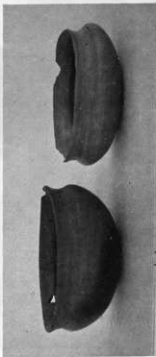
第 2 地区 B 地点出土



第 1 地区 C 地点出土

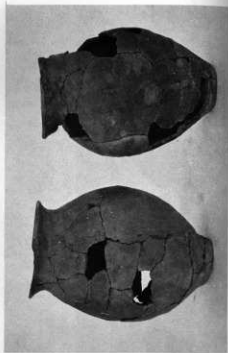
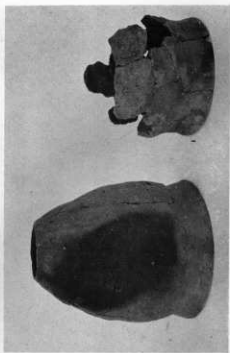


第 2 地区 A 地点出土

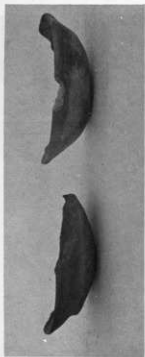


第2地区B地点出土

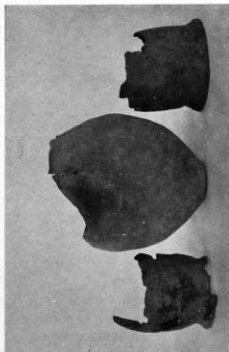
图版 I
出土文物



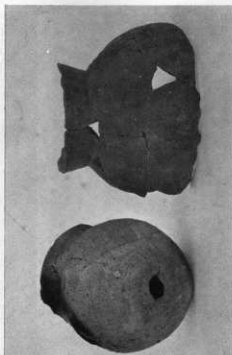
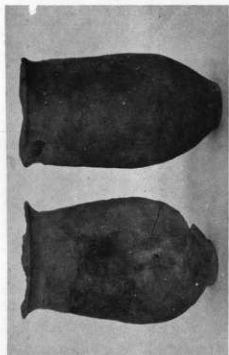
第2地区B地点出土



第 2 地区 B 地点出土



第 2 地区 B 地点出土

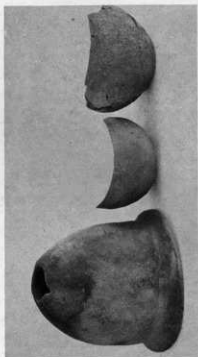


第2地区C地出土

图版 III
出土文物



第2地区C地出土



銅糸、耳環等の器



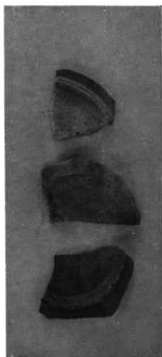
各地出土銅器



各地出土土



各地出土土



昭和45年3月15日印刷
昭和45年3月31日発行

福島県教育庁社会教育課
福島市杉妻町2-16

印刷 小浜印刷株式会社
福島市陣場町9-3